

海を渡った広島方言

—海外日系移民社会における方言の継承と変容—

中東靖恵(岡山大学)

1. 海を渡った広島県移民とことば

2018年の今年、ハワイ日系移民150周年、ブラジル日本移民110周年を迎えた。アジア・太平洋地域、南北アメリカなど、かつて多くの日本人が海外へ移住し、現在も約380万人の日系人(2016年度推定)¹が暮らす。移民とともに海を渡った日本の各地方言は、移住先での方言間接触や、移住先の言語との接触・混交をもたらした。広島県は全国一移民を輩出した「移民県」として知られ、戦前戦後合わせ、約11万人が移住した²。とりわけハワイには広島県移民が多く、戦前移民1世の24.1%を占めており、ハワイの日本語にも広島方言³が大きく影響している(比嘉, 1972)。また、日本語と英語・ハワイ語との言語接触も盛んに行われた⁴(小林, 1982)。

戦後1956~1957年に、広島県沼隈郡沼隈町の初代町長神原秀夫によって「町ぐるみ集団移住」が推進された南米パラグアイ⁵のLa Paz移住地には、在パラグアイ広島県人会(1960年創立)が置かれ、現在でも広島県人家族が比較的多く暮らす。以下は、発表者が2009年に調査で訪れた際に聞かれた広島方言を含む日本語とスペイン語交じりの発話である。

- (1) Usted [あなた] はどこに住んどったんか。(4) ここには maíz [とうもろこし] 植えとるよ。
 (2) うちの señora [妻] に聞いてみると分からん。(5) (発表者に対し) 先生は tranquilo [穏やか] じゃ。
 (3) (運動会で) Yo [私] の番だと思って走ったら… (6) (発表者の応答に) Si, sí. [はい, そう] [まいでのー, 先生。

1980年代以後、海外移住の時代は終焉を迎え、日系社会における世代交代による言語シフトの進行と日本語の衰退は著しい。世界最大の日系人口を誇るブラジルにおいても、すでにポルトガル語への言語シフトは完了している(中東, 2007)。一方、戦後移民の多いパラグアイ日系社会においても、1世から2世への過渡期を迎え、日本語からスペイン語への言語シフトが進行中であるが(パラグアイ日本人会連合会(編), 2017)、日本語を母語とする1世が多く暮らす農村部の日系移住地においては、今でも生活言語として日本語が機能し、若い世代でも日本語能力が高いことで知られる。このようなパラグアイ日系移民社会において、広島県移民によって持ち込まれた広島方言はどのように継承され変容しているのか。

以下に述べる中東(2011)の研究は、かつて発表者が行った広島市および山陽地方におけるアクセントの世代的地理的動態に関する一連の調査研究に基づき、パラグアイ日系社会に暮らす広島県人家族を対象に行ったアクセント調査の結果から、海外日系移民社会における移民言語としての方言の継承と変容の様相を具体像として描き出したものである。

2. 広島方言アクセントの世代的地理的動態に関する研究

広島市方言ネイティブである発表者は、学生時代、恩師とともに1993~1995年、以下(1)~(3)に示した広島市および山陽地方における方言アクセントの世代的地理的動態に関する調査研究を行った。各々の調査研究の概要を示す。

(1) 広島市方言アクセント調査とアクセントの世代的動態研究(馬瀬ほか, 1995): 1993年7~8月、広島市(安芸郡府中町・海田町も含む)生育の1898~1981年生の男女159名を対象に138項目を調査し、2・3・4音節名詞、外来語、3音節形容詞(言い切り形・連体形・過去形・ウ音便形・仮定形)、複合動詞のアクセントの特徴と世代的変動を中心に考察。

(2) 『広島市方言アクセント辞典』(馬瀬(編), 1994)の資料に基づくアクセントの世代的動態研究(馬瀬ほか, 1995c):

¹ (公財) 海外日系人協会「海外日系人数」より。http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html (2018年6月20日最終閲覧)。

² JICA「海外移住資料館だより」45より。https://www.jica.go.jp/jomm/index.html (2018年6月20日最終閲覧)。

³ 例えば、「みやすい(易しい)」「えらい(苦しい)」「つかあさい(下さい)」などの語彙や、「今日はノー、頭が痛いケンノー、仕事を休モー思う」のような間投助詞「ノー」、接続助詞「ケン」、格助詞「ト」の省略など(比嘉, 1972: 229)。広島県内でも広島湾沿岸の町村からの移民が多く、とりわけ旧安芸郡仁保島村(現広島市仁保町)にはハワイ移民が多い(広島県(編), 1993: 72-76)。この地に1997年に開館された「ハワイ移民資料館仁保島村」には、貴重な移民関連資料が保存・展示されている。なお、戦前1918年にブラジルへ移住した発表者の曾祖父母家族も仁保島村出身である。

⁴ ブラジルにおける方言交じりの日本語とポルトガル語との接触言語は「コロニア語」として知られる(Nakato, 2012)。

⁵ 首都Asunción, 国土面積約40万km², 人口685万人(2016年統計)、そのうち約95%がグアラニー系の先住民とスペイン系の白人との混血(mestizo)である。公用語はスペイン語とグアラニー語(Guaraní)で、国民の大半がスペイン語とグアラニー語のバイリンガルである。パラグアイへの日本人の集団移住は、1936年に建設されたLa Colmena移住地への入植に始まり、現在の日系人口は推定10,000人である((公財) 海外日系人協会, 注1参照)。

1994年、広島市生育の世代を異にする男女9人（1907～1972年生）を対象に約12,000語を調査し、2・3・4音節名詞、外来語、地名、3・4・5音節以上の形容詞、単純動詞・複合動詞、副詞のアクセントの特徴と世代的変動を中心に考察。

(3) 『山陽地方岡山—広島—下関ライン方言アクセントグロットグラム（地理年代図）集』（馬瀬ほか、1995a）の資料に基づく岡山—下関方言アクセントの世代的地理的動態研究（馬瀬ほか、1995b）：1994年7月～9月、岡山—下関間63地点において4世代（20～70代）252名を対象に175項目を調査し、1・2・3・4音節名詞、月名、地名、存在動詞・複合動詞・動詞否定形、3音節形容詞（言い切り形・連体形）のアクセントの特徴と地理的・世代的動態を中心に考察。

3. パラグアイの広島県人家族における広島方言アクセントの継承と変容の実態

3.1 調査の概要

- (1) 調査地域：パラグアイ南部 Itapúa 県 La Paz 移住地（1955年創設）および Chavez 移住地（1953年創設）。
- (2) インフォーマント：調査地域在住の広島県移民（1世）とその家族（2世・3世）。
- (3) 調査方法：面接調査。個人的属性、学歴、言語能力意識、メディア接触、言語生活等についての聞き取りを行った後、調査語（195項目）について、語単独あるいは調査語を含む短文（ルビ付き漢字仮名交じりで表記）を、調査語の意味を表す絵とともに示し、通して二度読み上げてもらい、ICレコーダー（TASCAM DR-07）に録音した。
- (4) 調査期間：2009年8月3日～8月14日。

3.2 インフォーマントの世代ごとの属性と言語的背景

インフォーマント数は44人（男21人、女23人）であった。分析に際しては、前節(1)に述べた広島市でのアクセント調査（馬瀬ほか、1995）の出生年による世代区分に従った。各世代区分に該当するインフォーマント人数と属性（生年・平均年齢・世代⁶）は表1の通りである。広島市調査では第Ⅰ～Ⅶ世代に区分されたが、パラグアイ調査では第Ⅰ・Ⅱ世代は高齢のため該当者がおらず、若い第Ⅷ・Ⅸ世代が加わっている。また、通学歴、日本語とスペイン語の言語能力意識、日本語とスペイン語のメディア接触、家庭内・友人間・日系団体内の日本語・スペイン語の使用についての概略も加えた。

表1 インフォーマントの世代区分と属性・言語的背景

区分	生年	平均年齢	世代	人数	通学歴	日本語・スペイン語 言語能力意識	メディア接触	家庭内・友人間・日系 団体での使用言語
第Ⅰ世代	1898～1909年	(該当者なし)						
第Ⅱ世代	1910～1921年	(該当者なし)						
第Ⅲ世代	1922～1933年	80.9歳	1世(成人移民)	7人	日本のみ	日本語>>スペイン語	ほぼ日本語	ほぼ日本語
第Ⅳ世代	1934～1945年	70.3歳	1世(成人移民)	3人				
第Ⅴ世代	1946～1957年	58.8歳	1世(子供移民)	6人	日本・パラグアイ両方	日本語>スペイン語		日本語>スペイン語
第Ⅵ世代	1958～1969年	44.3歳	2世	6人	パラグアイのみ	日本語<スペイン語	日本語・スペイン語両方	日本語・スペイン語両方
第Ⅶ世代	1970～1981年	34.5歳	2～2.5世	4人				
第Ⅷ世代	1982～1993年	20.8歳	2～3世	12人				
第Ⅸ世代	1994～2005年	12.3歳	3世	6人				

3.3 パラグアイの広島県人家族における広島方言アクセント継承と変容の実態

広島県方言アクセントは全域東京式であり、型の種類は共通語・東京語⁷と同じである。県内の地域差もあるが、地域を問わず若い世代での共通語化は著しい。ここでは、調査語の中から、2・3・4拍名詞、外来語のアクセントを取り上げる。表2に調査語数と調査の結果を、①世代的変動の見られない語、②世代的変動がいくらか見られるものの、全体的には第Ⅲ・Ⅳ世代の持つ伝統的アクセント型が優勢な語、③世代的変動が顕著に認められる語に分類して示す。

①②に分類される語、すなわち成人移民1世である第Ⅲ・Ⅳ世代が持つ広島方言の伝統的アクセント型が、パラグアイ育ちの第Ⅴ世代以降においても保持・継承されている語の多くは、日本国内の広島方言においてもアクセント変動の見られない語であり、かつ、広島方言アクセントが共通語・東京語と同じアクセント型である場合であった。

一方、③アクセントの世代的変動が顕著であり、若い世代でアクセントの新旧交代が見られる語の場合、その多くが、日本国内の広島方言においても同様なアクセント変動を見せる語であった。図1～3、図5～7を見られたい⁸。これらは、パラグアイでの調査と、1993年に広島市で行った調査（馬瀬ほか、1995）における、2・3・4拍名詞の調査語のうち、世代的変動の顕著な語について、2拍名詞5語「ねじ、熊、嘘、匙、火事」、3拍名詞5語「命、涙、めがね、もみじ、きのこ」、4拍名詞5語「足音、金持ち、年寄り、ものさし、のこぎり」の結果を総合して、図示したものである。

⁶ 日本生まれは「1世」、パラグアイ生まれは「2～3世」であるが、両親が1世と2世の子は「2.5世」、両親ともに2世であれば「3世」とした。

⁷ 共通語・東京語アクセントに言及する場合は、NHK放送文化研究所（編）（1998）日本語発音アクセント辞典新版、秋永一枝（編）（2001）新明解日本語アクセント辞典、馬瀬良雄・佐藤亮一（編）（1985）東京語アクセント資料（上・下）に基づくこととする。

⁸ 横軸は世代、縦軸は発音の割合（%）、グラフ中の数字はアクセント型を示したものである。

2拍名詞における尾高型2>頭高型1, 3拍名詞における中高型2>頭高型1へのアクセント変動は共通語化であり, 4拍名詞における尾高型4>中高型3への変動は, 共通語における新しい優勢な型への変化である。広島市方言では第IV世代から緩やかに始まり, 第V~VI世代以降で急速に進むアクセント変動により, X状のラインを描いて新旧アクセントが交代するが(図5, 図6, 図7), パラグアイでは広島市方言よりも複雑な様相を呈しながら, 世代的には少し遅れて, 第V~VI世代で緩やかにアクセント変動が始まり, 第VII~VIII世代で加速し, 広島市方言と同様なアクセントの新旧交代を見せる(図1, 図2, 図3)。外来語アクセントも同様, 「モデル」における頭高型1>平板型0への変動は第VII~VIII世代で顕著となり(図4), 広島市方言における外来語アクセントの平板型化(図8)はパラグアイ日系社会でも見られるのである。

すなわち, 日本国内の広島方言で起きているアクセント変動が, 「日本から最も遠い日系移住地」と言われるパラグアイ日系社会に暮らす広島県人家族の若い世代にも同様に起きているということであり, これまで全く知られていなかったパラグアイ日系社会の日本語の姿の一つとして, 特筆すべき事実である。

表2 2・3・4拍名詞・外来語の調査語におけるアクセントの継承と変容⁹⁾

	①世代的変動の見られない語	②第III・IV世代の伝統的アクセント優勢	③世代的変動が顕著な語
2拍名詞 42語	飴, 牛, 鼻, 水, 風(0), 空, 箸, 松, 肩, 海, 雨, 春, 窓, 秋, 夜(1), 川, 歌, 橋, 足, 池, 波, 花, 山(2)	糸, 板(伝0/1, 2), 靴, 服, 旗, 梨, 蟬, 夏, 冬(伝2/1, 0)	神, 雲, ねじ, 熊, 嘘, 匙, 火事(2>1), 北, 人, 上(2>0)
3拍名詞 40語	形, 印, 隣, 背中, うさぎ, 桜(0), 天気, 料理(1), ひとり, 五つ, お菓子(2), 醤油(3)	苺, 菓(伝0/2), からす(伝1/2), 朝日(伝2/1, 0), 心, 力(伝2/3, 0), ふたり, 言葉, 男, 頭(伝3/2, 0), 女(伝3/1, 0), 卵(伝2/0)	りんご, 電話, 後ろ(1>0), 命, 涙, めがね, もみじ, きのこ, 家族(2>1), 時間, 国語, 着物(2>0), 東(3>0), 会議(3>1), はさみ, 鏡(3>2)
4拍名詞 27語	七夕, 友達, 新聞, 学校(0), あいさつ, 全国(1), 紫, 九つ, 手袋(2), 弟, 妹(4)	ひらがな(伝3/0), 色紙, 味噌汁(伝3/2, 0), 先生(伝3/0, 1), 生け花(伝2/0)	神様, 富士山(2>1), 足音, 金持ち, 年寄り, ものさし, のごぎり, 腰かけ(4>3), 鉛筆, 大根(3>0), 日本語(4>0)
外来語 8語	—	テレビ, ラジオ(伝1/2), リレー, バレー, レモン, ドラマ(伝1/2, 0)	コップ, モデル(1>0)

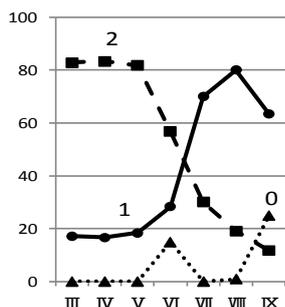


図1: 2拍名詞5語 (パ)

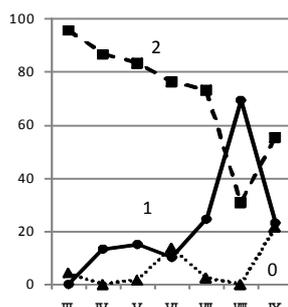


図2: 3拍名詞5語 (パ)

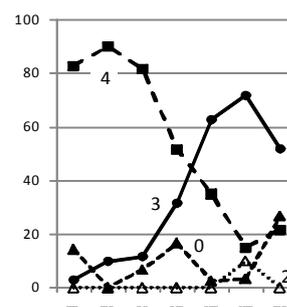


図3: 4拍名詞5語 (パ)

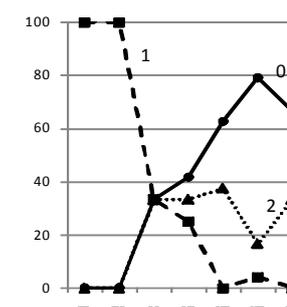


図4: 「モデル」 (パ)

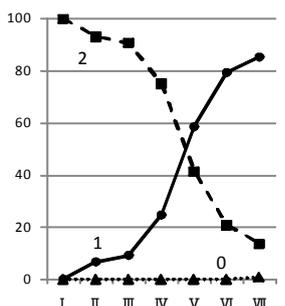


図5: 2拍名詞5語 (広)

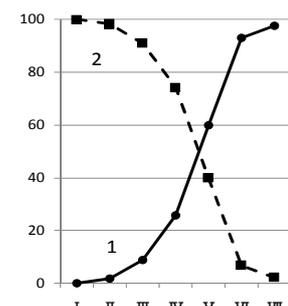


図6: 3拍名詞5語 (広)

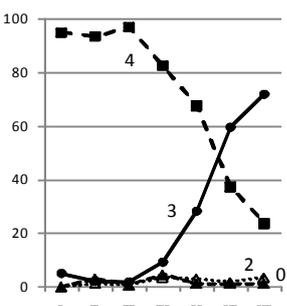


図7: 4拍名詞5語 (広)

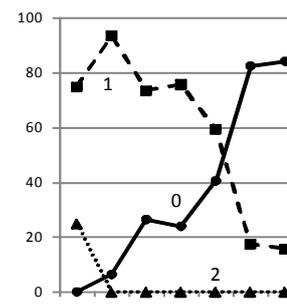


図8: 「モデル」 (広)

3.4 パラグアイの広島県人家族における広島方言アクセントの変動をもたらす諸要因

では, このようなアクセント変動を促す背景には何があるのだろうか。広島市のテレビの普及は1955年頃から始まり1959年にピークを迎える。言語形成期を3, 4歳~13, 14歳とすると, 第V世代(1946~1957年生)は言語形成期の途中で, 第VI世代以後(1958年生~)は言語形成期の初めからテレビに接触した世代となる。第V世代から共通語得点が大きく伸長するのは, 言語形成期におけるテレビとの接触による影響である蓋然性が高いと考えられる(馬瀬ほか, 1995)。

⁹⁾ 表2の括弧内の数字は, アクセント核の位置を語頭から数えた拍数によって示したものである。②欄内, 括弧内/の左に第III・IV世代の伝統的アクセントを「伝」として示し, 括弧内/の右には第V世代以降で世代的変動が見られるアクセントの型を数字で示した。

一方、海を隔てたパラグアイ日系社会におけるアクセント変動には、どのような要因が関わっているだろうか。第V・VI世代が言語形成期を過ごした時期は、日系社会の多くが1世で構成される日本語中心社会であり、移住地外での生活も長くないため、親世代である第III・IV世代の伝統的アクセントをよく保持していると考えられる。

これに対し、孫世代に当たる第VII・VIII世代においては、

1980年代から始まる移住地の電化・インフラ整備により、テレビ・ビデオの安定的視聴、NHK放送の受信やインターネットの利用が可能となり、さらに日本語学校では、JICAから派遣される日本語教育専門家により日本語を習うことが可能となった。日本語教育環境の充実、日本との人的交流の活発化とメディアを通じての「日本の日本語」との日常的接触は、移住地の日本語環境に大きな変化をもたらし、この時期に言語形成期を迎えた第VII・VIII世代における日本語能力の維持・向上と、日本語の新しいアクセントの獲得に寄与したものと考えられる。だが、こうした高い日本語能力の保持は最も若い第IX世代において少し危うくなっており、アクセントの型別が曖昧になる傾向のある者が見られた(表3)。

移住地と都市部とのアクセスが容易になったことで、移住地からの人口流出とともにスペイン語への言語シフトが加速化するだけでなく、1992年に公用語となったグアラニー語(注5参照)の教育が始まり日本語学習の時間が減少するなど、今後、世代交代とともに、移住地の言語生活は大きく変貌していくのではないかと思われる。

3.5 パラグアイ日系社会における日本語の新たな姿

調査から3年経った2012年、再びパラグアイを訪れた。1世の高齢化とともに「移民言語としての日本語」の衰退を肌で感じる一方で、若い世代で「日本の日本語」との日常的接触が以前より活発に行われている様子も目の当たりにした。一つには、日本語学校に非日系パラグアイ人が増えており、「外国語としての日本語教育」の必要性が顕在化してきていること、さらに、パラグアイの学校教育機関で日本語を学ぶパラグアイ人も増加し、パラグアイ国内で「日本の日本語」に接する機会は着実に増えている。また、デカセギによる「日本の日本語」との接触と習得、それをさらに後押しするFacebook等をはじめとするSNSの急速な普及は、国や地域を越えてパラグアイ日系人や日本に暮らす家族・親戚・友人らとのネットワークを構築する新たなコミュニケーション・ツールとして機能し、「日本の日本語」の習得・使用に大きく関わっていると考えられる。パラグアイ日系社会におけるこのような日本語の新たな動向は、今後も注目に値する。

謝辞 100年前の1918年、移民を多く輩出した仁保島村出身の曾祖母家族は広島からブラジルへ移住した。移住100周年を迎えた今年、故郷の広島で招待発表の機会をいただいたことを学会関係者の皆様に対し心より感謝申し上げます。

引用文献

比嘉正範(1972). ハワイの日本語 安里源秀教授退官記念論文集 英宝社 pp. 217-246.
 広島県(編)(1993). 広島県移民史 通史編 広島県
 小林素文(1982). ハワイ日系人のバイリンガリズム 愛知淑徳大学論集, 8, 143-158.
 馬瀬良雄(編)(1994). 広島市方言アクセント辞典 中野出版企画
 馬瀬良雄・小橋裕恵・竹田由香里・中東靖恵(1995). 広島市方言における語アクセントの動態 音声学会会報, 210, 1-15.
 馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵(1995a). 山陽地方岡山—広島—下関ライン方言アクセントグロットグラム(地理年代図)集 フェリス女学院大学馬瀬研究室
 馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵(1995b). グロットグラムによる岡山—下関方言アクセントの研究 日本音声学会全国大会予稿集, 66-71.
 馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵(1995c). 広島市方言語アクセントの特徴と世代的変動—『広島市方言アクセント辞典』の資料をもとに— 日本方言研究会第61回研究発表会発表原稿集, 25-34.
 中東靖恵(2007). ブラジル日系移民社会における言語生活—ブラジル日系人の言語能力意識と意識にかかわる諸要因— 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書, 6, 315-333.
 中東靖恵(2011). パラグアイ日系社会におけるアクセントの継承と変容—パラグアイの広島県人家族を対象に— 社会言語科学, 13(2), 72-87.
 Nakato, Yasue. (2012). Japanese Immigrants in Brazil and 'Colonia-go': Japanese as an Immigrant Language, *Global Migration and Ethnic Communities: Studies of Asia and South America*, Trans Pacific Press pp. 211-231.
 パラグアイ日本人会連合会(編)(2017). パラグアイ日本人移住80年記念誌 パラグアイ日本人会連合会

表3 広島県人家族のアクセントの継承・変容の世代的推移

日本生まれ	1世(成人移民)	第III・IV世代	【伝統アクセント母語世代】
	1世(子供移民)・2世	第V・VI世代	【伝統アクセント保持世代】
パラグアイ生まれ	2世～3世	第VII・VIII世代	【新アクセント獲得世代】
	3世	第IX世代	【アクセント型消失世代】